

4. 「サチユタカ」における大豆バサグラン液剤の使用法（技術）

[要約]

大豆バサグラン液剤は、「サチユタカ」の葉齢 5～6 葉期までに、薬量 150ml を処理すると除草効果が高く、薬害の発生軽減には夕刻に処理するとよい。

研究室名

作物研究室

連絡先

086-955-0275

[背景・ねらい]

大豆作では生育期に全面処理できる広葉雑草対象の登録薬剤がなく、広葉雑草の防除が大きな問題となっていた。平成 17 年に新規登録された茎葉処理除草剤「大豆バサグラン液剤」は薬害が出やすいことがわかっているため、薬害が発生しにくく、除草効果の高い処理法をサチユタカで検討する。

[成果の概要・特徴]

1. 大豆バサグラン液剤処理による薬害の症状は薬液付着による葉の褐変（軽微な褐色斑と黄化）であり（図 1）、処理後の展開葉に薬害はみられなかった。
2. 薬害発生率は、薬量が多いほど増加し、同じ薬量では処理時の大豆葉齢が小さいほど高かった（図 2）。また、大豆葉齢 5～6 葉期処理では、14 時に比べて 17 時に処理することで薬害発生率は低下した（図 3）。
3. 薬量 150ml 処理では除草効果が高かったが、100ml 処理では除草効果が劣り、広葉雑草の残存量が多かった（図 4）。
4. 処理後の生育は、大豆の葉齢が小さい時期に処理すると主茎が短くなる傾向にあったが、いずれの処理でも収量は無処理区より低下することはなかった（表 1）。

[成果の活用面・留意点]

1. 本剤の使用基準は、大豆の 2 葉期～開花前、雑草の生育初期～6 葉期、収穫 45 日前まで、薬量 100～150ml/10 a、希釈水量 100L/10 a、使用回数 1 回である。
2. 使用前に本剤のラベルに記載されている注意事項をよく読み、理解してから使用する。
3. 有機リン系殺虫剤を使用した圃場では、薬害が助長された事例が報告されている。
4. 播種後の土壌処理除草剤との体系で使用する。また、イネ科雑草には効果がないので、イネ科雑草が混在する場合には、これらに有効な除草剤との体系で使用する。
5. 「サチユタカ」の薬害発生程度は葉齢が低いほど高い。また、薬害には品種間差があり、「タマホマレ」は「サチユタカ」、「トヨシロメ」に比べて薬害程度が高い事例がある。

[具体的データ]



図1 大豆バサグラン液剤処理によるサチユタカの葉害症状

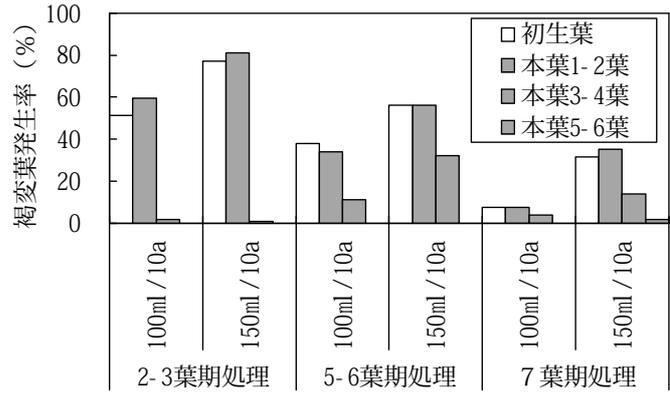


図2 大豆バサグラン液剤の処理時期・処理量によるサチユタカの葉位別褐変葉の発生率

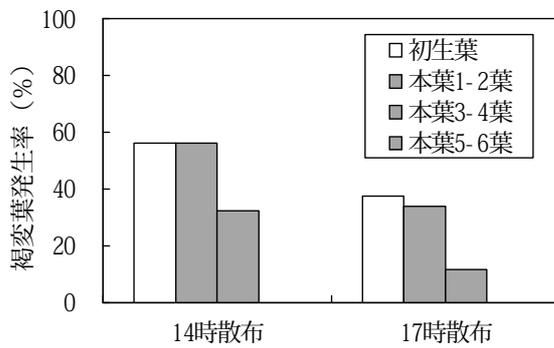


図3 大豆バサグラン液剤の処理時刻によるサチユタカの葉位別褐変葉の発生率
注) 5-6葉期に150ml/10a処理

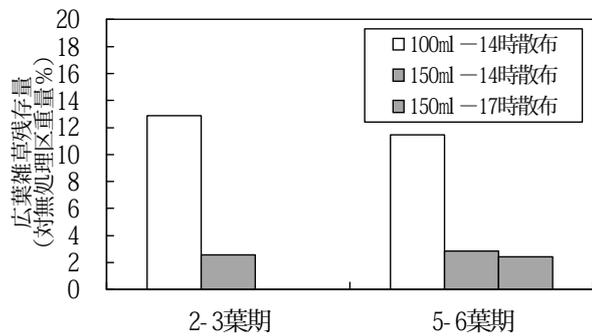


図4 大豆バサグラン液剤の処理時期・処理量・処理時刻による広葉雑草の残存量
注1) 播種後に土壌処理剤を処理
注2) 無処理区の残草量は14.12g/n²

表1 大豆バサグラン液剤処理がサチユタカの生育と収量に及ぼす影響

処理時における大豆の葉齢	薬量 (ml)	散布時刻 (時)	主茎長 (cm)	節数 (節)	分枝数 (本)	全重 (kg/10a)	子実重 (kg/10a)	同左無処理比 (%)	百粒重 (g)
本葉2-3葉期	100	14	62	14	2.0	797	488	111	33.0
	150	14	60	15	2.2	867	534	122	33.3
本葉5-6葉期	100	14	62	14	2.0	744	448	102	32.5
	150	14	60	14	2.2	838	506	115	33.6
本葉7葉期	150	17	63	14	1.9	737	436	99	33.7
	100	14	58	14	4.7	797	443	101	33.5
本葉7葉期	150	14	61	14	4.1	808	464	106	34.1
	無処理	0	-	67	15	1.6	771	439	100

注) 残草調査後に全区の発生雑草を手取り

[その他]

試験研究課題・事業名：中小規模圃場に適した不耕起密植栽培技術の中核とした大豆新栽培システムの確立

予算区分：受託 (ブランド・ニッポン)

研究期間：平成15~17年度